

終電車 水野仙子

處女一月號 (五八)

『姜やわづらうてな。』と寄り添ふ夕霧の言葉が、まだ私の耳のあたりに漂つて居る。と我にもなく口を噤んだまゝ舌の上でその臺辭を繰返してゐる。姜やわづらうてな。

『蓋の華やぎが、まだ私の精神を柔くふりはりと包んでゐるのであつた。』

淺草橋の伯母さんとこへ寄つて、さんざ伊左衛門の品定めをして、電車がなくなりさうなので慌て、暇を告げて来た私は、須田町の乗換場から、駄目だとは思ひながらそれでもはいつてみた萬世橋の停車場に思ひ掛けなく最終の電車が待つて居た。私の住んでゐる代々木には、この方がどんなに近いのである。

『覺め切らぬ夢のあとを追つてゐるやうに、ぼんやりとしてゐる私のうそ寒さに刺げた顔が、暗い窓硝子に佻しくうつてゐる。あちらの隅に一人、その中央に一人といつた風に、ちらほらと場を取つてゐる人達、或は眠りこけたり、腕組をしてもの思ふらしくしてたりして、色の褪めかけた腰掛けの花模様、粘り氣のない氣分が漂つてゐる。』

いつとこまでどう来たかわらなかつた。恐しいほど速力を出して駆ける電車が、烈しい動搖を少しく緩めて来たのを、ぼんやりと意識する間もなく、電車はしゆうつと一つのプラットホームに横づけにされてゐる。

『よつや——』
『よつや——』と車掌が呼んでゐる。

とそこらに打つかるやうにしてどつかりとはいつて来た一人の男がある。誰が降りやうと誰が乗らうと一向氣にもとめないでうつかりしてゐた私の前に、立ちはだかるやうにする／＼として『やあ！』といふ。私はふいと顔をあげた。

『まあ！』

その人は倒れるやうに私の傍に腰を下して、窓框に頭を凭せかけて眼をつぶつた。私は初めてみるこの人のかういふ有様に、思はず泛べた微笑の中に、閃くやうに影のさして消えた不思議な寂しさを自ら見逃さなかつた。

『どちらへ行つてらつしやいましたの？たいへん御元氣ぢやありませんか。』

『え、ハ、ハ、ハ』と厭味氣なく何やら言つたのが、電車の音に掻き消されて、私の耳にはたゞ『友達』といふ言葉だけがはつきりと残つた。再び眼を閉ぢて快く揺れるに委せてゐるやうな容子をみると、私は向き直つて又しよんぼりと暗い窓硝子に對ひあつた。

ぼつりと縁が切れたやうに、華かな幻は後速く去つてしまつて、たゞもの思はしげな、何かを考へやうとする心は、私の心を否應なしに沈めて行つた。

『畑野さん、畑野さん、』といふ姓は、私に取つて憚ることなしに快い響である。私はこの人が好きなのである。けれどそれはどんな内容を持つてゐるのだらう？

私はふと、二人の女が或日火鉢を圍んで、曾ての自分達の周圍であつた男達の噂に興じたことを思ひ出した。それは一日に見渡したやうな二人の追憶であつた。

『……昔ねえ！』

「ほんとに考へてみると一昔ねえ！」

「畑野さんもおんと御卒業なすつたんでせう？」

「え、法學士！銀時計ですつて！」

「早いものねえ！」

かう言つて二人は暫くだまつた。

「私あの好きさ！」とやがて、一人は胡摩化すやうにわざと碎いた調子で言つて笑つた。

「私も。」と一人は言葉短かに同意して凝乎と友達の顔を見つめた。

二人はまた暫く無言つて、一人が灰箸で灰に字を書いては消し書いては消し、てゐるのを一人は見えてゐた間もなくすると、前の一人はふと顔をあげて、何かもの言ひたさうに暫く美しい笑顔をつくつてゐたが。

「だけどね、私畑野さんて人は怖い人なのよ。」

「どうして？」

「どうしたつて……あの鋭さ、あの何も彼も見ぬくやうな明晰な頭……私なんだか怖いわ、あの目で凝乎と見られると身がすくむやうな氣がするのよ。」

「だつてあの人は貴女にラヴしてましたよ！」

「嘘ですよ！」

「い、え、ほんとう。」と一人は眞面目だつた。

「どうして？」

「どうしてつてほんとうだからほんとうだわ。」

「ほんとうかしら？だけど貴女どうしてわかつて？」

「私あの人が好きだから！」

再び二人は黙りあつた。そして美しい一人が言つた。

「だけど、私どうしてもほんとうと思へないわ。私は却て畑野さんは貴女にラヴしてらつしやると思つてよ。」

「まあ！それこそ嘘ですよ。」

「い、え、ほんとうに私さう思つてたの、貴女が畑野さんと話してらつしやるところを見ると、ほんとうによく解り合つて、そして面白さうなんですよ！私臆から見て、どんなにそれが羨しかつたでせう！なんだか寂しい氣がしてならなかつたわ。」

「まあ、寂しかつたのは私ですわ。あの人は貴女を思つてらしつたんですもの……。」

「昔ねえ！」

「全くね、もう四年になるわ！」

「さうだ、そのなんとなく寂しいのがその内容の總てである！」と私は思つた。その外には何の際立つた感情もない。

見馴れた停車場の灯がちらく窓にはいつて來ると、乗換を知らせる車掌の聲が、更けて行く夜の氣に徹つて澄んで行く。

『もし、代々木でございますよ。』と、私は氣持よさうに寄りかゝつて眠つてゐる畑野さんに聲を掛けた
『や、有難う!』

そこに降りる者はたゞ二人より外になかつた。私は掃き清められた段々を竝んで降りた。

『あゝ馬鹿に睡かつた。』

『随分召上れたやうですのね。』

『えゝまあ可なり……。』

『お友達は大勢でらつしやいましたの?』

『いゝえ、なに三人ばかりです。あゝ、無暗に怒鳴り散したものだから、すつかり咽喉が潤ちやつた!』

私はそれまで、先刻耳に残つた『友達』といふ言葉から、譯もなく誰かの送別會といふことに考へてしまつて、そしてわやくと集つた大勢を心に畫いてゐた。

『四谷からお乗りになつたやうでしたのね、どちら?』

『赤坂の方でした。』

私は不思議に心許ないやうな氣がした。けれどそれ以上立入る勇氣はなかつた。

櫻の木の下の変番の巡査が、靴の音と下駄音とに振り向いて、薄暗い中から二人を見送つた。

『どうです、近頃何か面白いことがありますか。』

『いゝえ、ちつとも。この頃は世帯の苦勞ばつかし。』

『ハ、それが面白いんぢやないんですか。彌り者はちつとふてられますな。』

『あら!そんなことぢやないんですよ。』

『ハ、まあそんなもんでせう。時に何は、矢澤さんはどうしました、赤ちゃんが出来たんでせう。』

『えゝ大きくなりましたよそりあ。』

『女のお子さんでしたね。』

『えゝ。』

『まだ一人ですか。』

『えゝ。』

『貴女はどうです?ハ、ハ、ハ、』

後からくと断れ目を厭ふやうに言葉を次々のと、男足の早目なのに少し息を切らしながら、それはほんとの調子ぢやないくと私の心はかぶりを振つた。

『もう一人位あつてもいいんぢやないんですか、寂しいでせう。』

『そりあ、どつちにしたつて、二人だつて三人だつて私達の寂しさは同じだらうと思ひますわ、たゞ複雑になるだけのことぢやないでせうか。』

『さうですね、寂しいですね!』

『私、寂しくつていゝと思ひますわ、寂しいのがほんとに思ひますわ。』

『さうでせうかねえ、だが僕は寂しいのは厭だ。寂しいと消極的になつて不可ん!』

冷たい夜氣に觸れて、少しづつ酔ひがさめて行くらしく、畑野さんの足取りは思ひの外しつかりしてゐる。そのこつこつといふ靴の音が、時々暗い道の小石に當つて、ひつそりとした屋敷町のところくくの門に、薄ぼんやりとしてゐる電燈が隣くやうな氣を起させる。

『女は駄目ですな!』

暫くしてから、畑野さんは何の續きともなくぼつりとかう言つた。

『さあ……或は是認するより外仕様がなにかも知れませぬねえ……』私はそれはどういふことであるのだらうと思ひ、惑ひながら言つた。『だけと……』

私の心は少し落着かなくなつてゐた。もう三四軒先の荒物屋の横町を私は曲らなければならぬのである。なんだかそれが残り惜しいやうな氣もする。けれど一步でもそこから先に私の足が出たら……そしたらそれが、私が私の平和を蹂躪する第一歩なのである。

『だが貴女はまたいゝ、家に歸りや待つて呉れる人がある、僕は寂しいな、これから家に歸つて、さ(犬の名)を對手にして……』

私はふと立止つた。私は荒物屋の角に立つてゐる。畑野さんは一向思ひ懸けなかつたやうに、そのまゝの歩みを猶二三歩保つた。

『ぢや……』と聲をかけると、初めて氣がついたやうに一寸立止つて、

『や、こゝでしたか、ぢやさよなら!』

そのまゝ元氣よくこつ／＼と畑野さんは歩いて行つた。

私は暗い横町にはいつた。と、もの、匂ひのやうに夫の懐しさが私の胸を包みに來た。優しいその眸の前には、雪が朝日にあふやうにこの寂しさも消えて行くのだと思ふと、すらりとした背廣の後姿に私の心は餘計さびしかつた。

とつかの時計が長く／＼後れた十二時を打つた。

銀 貨 川 浪 道 三

ある秋祭の日の思ひ出である。

その頃、私はまだ、たゞ遊びたいばかりの十一の子供であつた。毎日、學校から歸ると本を投げ出して置いて、近所の子供たちと一緒に野や山を遊び廻つた。翌朝學校に行く段になつて、包んで置たまゝになつてゐる筈の本の所在が分らなくて、母に叱られることがよくあつた。

その日は、いつもより早く目が覺めた。ふと雨戸の隙間から射し込んでゐる朝の光が障子の外の青い木の葉の揺らぎを映してゐるのを見ると、何となくその日一日が幸福であるやうな氣がされる。臺所の方では、母がもう起て何かをこゝくいはしてゐる。私はまだ眠つてゐる姉や弟の耳を窺ひやうにして起きあがつた。もう眼の前には、美しい踊や、のぞき眼鏡や、旗や、提灯や、果物、菓子、群集などがちらついたり、まだ聞えもしない浮立の音を聴いたりしてゐた。

然し學校には行かなければならなかつた。朝の食事も、いつものやうに兄弟喧嘩もせず、いたづらもし合はずに済ました。そして私は本と辨當とを持つて、父より先きに出て行つた。父はその頃、吾々の學校の校長をしてゐたのである。

私の家は、谷間の大きな溜池に沿うて立つてゐた。満々と堪へられた、青い、透き通るやうな水の面には、早や秋に色づいた周囲の山や林——榊、樺、杉、松、男竹などのこんもりと茂つた——のさまが映つてゐて、朝の耀かしい太陽が、水の上を、私の歩く方へ行つた。夏の間は、一日に二度も三度もこの水に泳いで、唇を紫色になしては、熱い南國の日に龜の如く甲を干した。その爲に自分の背中には、蛇のやう

